

「はたちのわたしへ」

先日、私のもとに一通の手紙が届きました。それは、「はたちのわたしへ」と書かれた、十五歳の私からの手紙。そこにあったのは、十五歳の私が想い描く、はたちの私の姿でした。好きな人はいますか？飼う犬は元気ですか？勉強頑張っていますか？残念ながら、半分以上が「いいえ」の回答。五年前に抱いていた夢を懐かしむ反面、諦めて置いてきてしまったものの多さに、少し悲しみを感じました。ただ、ひとつだけ自信を持って「はい」と答えられることがありました。それは、「鳴門に帰って来ますか？」という質問です。

私は五年前、周りの大反対を押し切って、親元を離れて寮生活をはじめました。引っ込み思案で、ひとりじゃ何もできない私が寮生活をするだなんて、誰が想像できたでしょう

か。なんとなくみんなと同じ地元の高校に行
って、なんとなく毎日を楽しく過ごして、な
んとなく入れそうなところに就職できれば
いいや。そう思っていた私の考えを変えるき
っかけとなったのは、一番の親友の夢でした。
当たり前のようにこれからもずっと一緒だ
と思っていた親友が、偏差値の高い市外の高
校を受験すると言ったのです。そのとき私は、
絶対一緒の高校に行こうねと言い、親友の足
枷となっていた自分を恥ずかしく思いまし
た。それと同時に、夢を追いかけるための一
歩を踏み出そうとしている親友のことをと
ても誇らしく思いました。これが、私が自分
の夢を見つめ直すきっかけとなりました。

今まで自分が歩いてきた道を振り返ると、
「私なんかが絶対無理だ」と諦めたひとつの
夢を見つけました。それは、「鳴門市に本社
を構える、大塚テクノに就職する」という夢

です。私は昔から、現実にならないものを想像することが好きでした。例えば、空飛ぶ靴や、電気やガソリンを一切使わず走る車など。これらをただの夢物語で終わらせるのではなく、デザインや構造までしっかり考えて、本当に現実になるかもしれないと思う度にわくわくしていました。私は想いをカタチにするものづくりに強い興味がありました。しかし、ものづくりは男性のすることであって、女性のすることではないと、諦めていました。そんな私に与えられたのが、専門的な技術が学べ、エンジニアの卵を育てる阿南高専という進路だったのです。必ず帰ってくるから、五年間だけ夢を追う時間をください。そう周りを説得すると、両親は私の背中を力強く押ししてくれました。

そして今年、五年間の努力がようやく実りました。私は、大塚テクノ初の女性技術者と

して採用されたのです。女性ならではの視点から新しいものづくりを展開し、夢をカタチにできるような、そんな技術者になりたいです。ここ鳴門から、私の作ったものが、世界に出ていく未来があるのかもしれない。

今の私は、昔の私が想い描いていた姿ではないのかもしれませんが、でも、どんな形であれ、昔の私に誇れるはたちの私でありたいと思います。